

「インタラクトする風景」

唐突ともうつる特集に、少し戸惑った読者もいるかと思う。

解題は、共同で編集をおこなった秋庭氏の巻頭言をお読みいただければ、必要十分だろう。ひと言付け加えるなら、二人の編集担当者が文学研究科ではなく、情報科学研究科に属し、日々、情報学の名の元にあることは、そのタイトルと無関係ではない。

竹中克行、栗田秀法、田路貴浩、岡田昌彰の四氏には、そんなテーマにおつきあいいただいたばかりか、力のこもった論考をお書きいただいた。超域的な風景論が、浮かび上がってきたとするなら、ひとえにそのおかげである。心から感謝の気持ちをお伝えしたい。

そして、この三年ほどの間、眼差しの何がしかの部分で共有してきたアーティスト、尾野訓大、先間康博、榎田珠実、村上誠の四氏から、写真を提供いただけたことも、この特集のもうひとつの力となった。ささやかな誇りを感じている。アーティストにとっては第一義的な発表の場ではなからうが、この誌面のためにも少なからぬ思考と制作の時間を割かれたことだろう。今号もグラビアを担当くださった四方幸子氏の「メディアシティ・ソウル」の詳細なレポートにもまた、多くの図版が掲載された。テキストが多くを占める機関誌に、イメージの場を、という個人的な抵抗の陣を共に張っていたという面もふくめ、お礼を申しあげたい。

今回も多くの研究論文を投稿いただいたが、ご覧のとおり5本を掲載することとなった。7本のレビューとあわせて、いずれも読みごたえのある、本誌にとっては欠くことのできない存在である。

表紙のひとつの穴と、三つの穴のイメージは、創刊号からデザインを担当いただいていた金武智子さんのアイデアである。その意味合いを楽しみ、装幀の風合いをゆっくりと味わっていただきたい。編集作業を研究の時間を割きながらサポートいただいた大竹瑞穂さん、的確かつ迅速に英語のチェックをしてくださったトーマス・カバラさんには、たいへん感謝している。

『JunCture』を発行してきた日本近現代文化研究センターは、この3月をもって4年半の活動を終え、4月より「アジアの中の日本」研究センターへと改組される。しかし、この『JunCture 超域的文化研究』は、続けていくことになった。両センター関係者一同の強い意志もあるが、それにもまして、これまでさまざまな形で関わり、また理解と支援をいただいた諸氏のお力あるゆえのことと、あらためて謝意を表したい。(茂登山)